

終身会員についてのお知らせ

本会では、終身会員制度を設けております。

終身会員の申請基準：満75歳以上で、正会員在籍年数が合計15年以上の正会員のうち、本人の申し出により社員総会の承認を得た者。

終身会員申請の受付は、以下のとおりとなります。

申請方法：指定の申請用紙に記入の上、事務局まで郵送かメール添付にてお送りください。

締切：2016年9月15日事務局着。

指定申請用紙の請求及び問合せは事務局 (e-mail: office@jsdp.jp, Fax: 03-5840-9338) をお願いします。

日本発達心理学会ニューズレター第78号目次 (2016年6月30日発行)

代表理事就任あいさつ

日本発達心理学会の3つの取り組み.....本郷 一夫 1

【特集】「アロマザリング—多様な繋がりの中での子育て—」

愛着研究の現在とこれから.....高橋 恵子 2

ヒトにおける豊かなアロマザリング.....根ヶ山 光一 4

社会的養護を必要とする子どもたちの情緒・行動上の特徴と

必要な支援.....大原 天青 5

大学生を対象とした子育て見習いの取り組み.....小島 康生 6

高齢者による地域の子育て支援の取り組み.....田淵 恵 7

ふたごのチンパンジーに対するアロペアレンティング.....岸本 健 8

チンパンジーとヒトの比較から見たアロマザリング.....林 美里・友永 雅己 10

研究余瀆

数の初期発達とシンボルシステム.....山形 恭子 11

研究室紹介

東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科.....平野 真理 12

International Views (海外見聞録)

英国心理学会に参加して.....大神田 麻子 13

学会・研究会紹介

日本福祉心理学会.....井出 智博 14

学会からのお知らせ

国際研究交流委員会より.....常 深 浩 平 15

国内研究交流委員会より.....東海林 麗香 17

出版企画委員会より.....尾崎 康子 18

事務局より..... 19

発行：一般社団法人 日本発達心理学会

学会事務局
〒113-0033
東京都文京区本郷7-2-5
平清ビル401
TEL 03-5840-9336
FAX 03-5840-9338

編集事務局
〒422-8529
静岡県静岡市駿河区大谷836
静岡大学教育学部
中道 圭人
TEL: 054-238-4712 (直通)
Email: nakamichi.keito@shizuoka.ac.jp

編集：ニューズレター委員会

インターネット・ニューズ委員会
JSDP COMPU NET
伊田 勝憲
ida.katsunori@shizuoka.ac.jp
学会ホームページ
http://www.jsdp.jp/



New letter
ニューズレター

2016年6月30日
第78号 (年3回発行)

日本発達心理学会

Japan Society of Developmental Psychology

ホームページ http://www.jsdp.jp/

代表理事就任あいさつ

日本発達心理学会の3つの取り組み

本郷 一夫 (東北大学大学院教育学研究科) hongo@sed.tohoku.ac.jp

第2期に続き、一般社団法人日本発達心理学会の代表理事を務めさせていただくことになりました東北大学の本郷一夫です。1989年12月の学会設立以来、開かれた学会運営と常に新たな試みに挑戦してきた日本発達心理学会の歴史と伝統をしっかりと受け止め、引き続き、役員の方々とともに日本発達心理学会のさらなる発展に取り組んでいきたいと思っております。

代表理事として第3期の2年間に取り組みたいと考えている課題は、大きく3つあります。1つ目は、公認心理師法成立後の対応です。日本発達心理学会は、公認心理師の専門性の向上に向けた様々な活動に積極的に関わっていきたくと考えています。それと同時に、臨床発達心理士認定運営機構を支える役割も引き続き担っていきます。これらの心理職の専門性を高める活動に対する関わりによって、支援を必要としている人々のニーズに添った支援方法の確立、発達支援を支える発達心理学的知見の蓄積などを目指していきたくと考えています。

一方で、公認心理師の養成を目指す大学においては学部・大学院のカリキュラムの再編が求められると予想されます。それに関連して、学部、とりわけ大学院において学生が発達心理学を学ぶ時間が少なくなることが心配されます。心理学についての幅広い知識を持った公認心理師が誕生することは非常に重要なことです。しかし、それが発達心理学を学ぶことの少なさ、さらには発達心理学分野の研究者養成の幅を狭めることになってしまっているのではないかと懸念しています。その点で、日本発達心理学会として、学部生、大学院生が発達心理学を学び、発達心理学の研究を推進できるような環境作りについてさらに検討していきたくと考えています。

2つ目は、研究の国際化を通じた発達心理学研究の発展です。日本発達心理学会は、毎年、国際ワークショップの開催、大会時における外国の研究者の講演・シンポジウムなどを通して海外の研究の知見を取り入れてきました。また、最近では、英国心理学会発達部門との交流による日本人研究者の派遣、英文書籍 (Frontiers in Developmental Psychology Research: Japanese Perspectives, ひつじ書房, 2016) の出版などを通して、情報の海外発信にも取り組んでいます。このような国際化は、必ずしもそれ自体が「目的」ではありません。むしろ、発達心理学研究を充実・発展させるための「手段」であると言えます。その点を踏まえ、今後、国際共同研究の推進も含め、研究の国際化とそれを通じた組織的な発達心理学研究の進め方について検討していきたくと考えています。

3つ目は、第2期の取り組みにも掲げた発達心理学会の社会的役割を意識した活動のさらなる充実です。東日本大震災後5年以上が経過しました。時間の経過に伴って解決した問題もあります。しかし、依然として残されている問題、時間とともに変化した問題、新たに出現した問題もあります。時間軸の中で人を捉えることを特徴とする発達心理学は、これらの問題の解決に最も寄与できる学問領域だと考えられます。また、その支援や研究を通して得られた成果は、国内外における今後の災害時の支援に役立ちうると思っております。その点で、東日本大震災後の支援の継続とその活動を通して得られた知見をしっかりと蓄積していきたくと考えています。

さらに、児童虐待、いじめ、不登校など、子どもを取り巻く危機も一向に改善の兆しはありません。この

Anthropology, 130, 96-102.

Kishimoto, T., Ando, J., Tatara, S., Yamada, N., Konishi, K., Kimura, N., Fukumori, A., & Tomonaga, M. (2014). Alloparenting for chimpanzee twins. *Scientific Reports*, 4.

チンパンジーとヒトの比較から見たアロマザリング

林 美里・友永 雅己 (京都大学霊長類研究所) hayashi.misato.4e@kyoto-u.ac.jp

ヒトとチンパンジーは、哺乳綱サル目(霊長類)ヒト科に分類され、両種の遺伝子の違いは1.23%だ。哺乳類は、卵ではなく赤ちゃんを産み、母乳を与えて育てる。そのため哺乳類の母性は妊娠と授乳の期間、密接な関係にある。子どもの養育期間は、ヒト科でとくに長期化している。チンパンジーでは約5年間、母親は一人の子どもを育てることに専念する。

チンパンジーの子どもは1歳前後まで、ほぼ母親に密着して過ごす。母子ともに慣れれば、子どもが空腹になると自力で乳首に近づき授乳がはじまる。そのため、チンパンジーの子どもはほとんど泣く必要がなく、ヒトの赤ちゃんに比べて静かだ。母親と一緒にいることで、子どもは種特有の社会的行動を学習する。さらに母親を安全基地として、周囲に探索の範囲を広げる。チンパンジーは長い時間をかけて、道具使用や季節ごとに変わる食物の種類や場所を覚える。

チンパンジーの母親は、ほぼ一人で子育てをする。チンパンジーは母婚型の父系社会で、子どもの父親が誰か不明だ。男性は全体で、集団を守り、母親から離れはじめた子どもと遊ぶ、という父親的な役割をはたす。女性は思春期に隣の集団に移るが、その前に母親が弟妹を産むと、姉によるアロマザリング行動が見られる。マハシという調査地からは、重度の障害をもつ子どもを母親と姉が協力して育てた事例も報告されている。ギニア・ボッソウのチンパンジーでは、祖母が若い母親による孫の育児を手助けした事例もある。飼育下では、非血縁のチンパンジーでも、アロマザリング行動を見せる(本特集の岸本を参照)。

チンパンジーは、利他的行動の自発性・継続性などの点で、ヒトとの違いが示唆される。ヒトの保育所などのように、社会システムとしてアロマザリングが存在するわけではない。だが、子どもをもつ母親が近くに集まり、子ども同士が遊ぶ姿はチンパンジーでも見られる。母親一人では大変な子育てでも、集団内でおこなわれると、アロマザリングによってサポートされるのは、チンパンジーでも同じだ。ここで重要なのは、母親の存在がすべての前提で、母親との関係を基盤

岸本 健さんのプロフィール

親子間で展開される相互作用に関心があります。チンパンジーの研究と並行して、ヒトの親子関係、特に乳幼児の指さし行動から始まる親子間のやり取りについても研究を続けています。行動観察を用いた研究スタイルは学生時代から変わりません。目を凝らす日々です。

に、子どもが母親以外の他者とかかわるということだ。母親によるマザリングがあるからこそ、アロマザリングが成り立つ。

チンパンジーはヒトの進化的隣人だ。彼らを対象に、ヒトの認知機能の進化的基盤を探る研究が数多くおこなわれてきた。初期のチンパンジー研究では、母親のいないチンパンジーの子どもをヒトが育てて研究がおこなわれた。ヒトの環境で、ヒトが母親代わりとなって育つと、チンパンジーはその知性を柔軟に発揮して、ヒトに近い振る舞いをする。手話や人工言語を覚えるなど、チンパンジーの高度な知性が次々と明らかになった。一方、ヒトに育てられて同種の遊び友達がいないと、チンパンジーらしい行動ができないこともわかった。あいさつができない、遊びや毛づくろいができない、交尾や育児ができない、とその影響は50年と言われるチンパンジーの生涯に長く禍根を残す。

ヒトもチンパンジーも、育児行動は遺伝的にプログラムされていない。うまく子育てするには、生後の社会的学習が重要だ。ヒトは、経験者の話を聞き、育児書やネットなどで情報を得ることができる。チンパンジーは、自身が母親に育てられた経験を持ち、身近に子育て中の母親がいると、初産でも子どもを抱いて育児をはじめめる可能性が高い。そういう経験がない飼育下チンパンジーでは、出産直後に子どもを抱かず逃げてしまうことがある。子どもを抱いても、初産の場合は母乳が出るまでに時間がかかる。チンパンジーもヒトも、新生児はしばらく口から栄養をとれなくても死なない体の仕組みになっていて、5日間程度は母親の体の変化を待つことができる。この間に、チンパンジーの母親の育児行動をいかに引き出すか、飼育する側の努力が試される。

昨年9月、熊本県の施設でチンパンジーの母親が子どもを産んだ。父親はTVバラエティーにも出演して有名になったチンパンジーだ。自然な交尾はできず、人工授精を重ねた結果の出産だった。母親は集団内で実の母親に育てられたので、出産直後から子ども

を抱くことができた。あとは授乳が軌道に乗るまで、気長に見守るべき状況だった。ところが生後4日でヒトが母親から子どもを引き離し、その様子はTV放映された。現在の国際的な標準では、チンパンジー母子を分離して人工保育するのは原則禁止されている。獣医学的理由で人工保育を選択せざるを得なかった場合でも、できる限り早期に母親のもとに戻すことが推奨され、国内外の成功例も多数報告されている。今回の事例では、子どもは獣医学的にも比較発達科学的にも全く問題がないように見受けられた。しかし生後半年になる今も、この子どもは母親から離されたまま育てられ、動物ショーのあとに一般公開されている。発達を支える基盤となる母親との関係を断たれ、ヒトの環境で不自然な生活を余儀なくされている。チンパン

研究余瀝

数の初期発達とシンボルシステム

山形 恭子 (京都ノートルダム女子大学) yamagata@notredame.ac.jp

最近子どもが音声言語の獲得にともなって文字・数・絵のシンボルシステムを如何に習得するのかを、特に数に焦点を当てて1~3歳児で取り組んでいます。シンボルシステムの発達は古典的テーマですが、生活上必須であるだけでなく、表象機能と関連する重要な問題です。文字はこれまで年長幼児以降の読み書き能力で検討してきましたが、上記のシンボルシステムの初期発達とシステム間の関連はほとんど解明されていません。これらのシンボルシステムは「書・描かれたもの」の理解・産出を指し、表記システムといわれます。表記システムは発達順序に差があり、音声言語による表現と異なる側面をもっています。特に、これらの表現媒体によって内面的な思考・イメージ活動の深化と拡大が想定されます。最終的に思考・イメージ活動の解明を目指していますが、現在は登山といえば3合目をさまよひ、最終の頂上までの道程は遙か遠いです。

私はすでに絵・文字の初期発達を探り、成果の一部を公開し(山形, 2000, 2013)、シンボルシステム間の発生・分化過程も調べています(Yamagata, 2007)。また、文字では表記間の識別を「表記知識」の視点から分析しました。今は数能力の初期発達に取り組み、システム間の分化過程とそれらの特徴の解明に努めています。数発達研究では計数・基数・計算・数概念を中心に個別の能力に着目されてきましたが、数表記(数読字・書字)を考慮した研究はおこなわれていません。そこで、数表記を含む数活動の発生過程

ジーは生後半年頃からミルク以外の食物も口にします。母乳は出なくても、母親であることに変わりはない。最初に抱いていたのだから、授乳以外の養育行動は引き出せるに違いない。アロマザリングについて幅広い視点で考える意味でも、私たちはこの事例に対して科学の眼でもって注視していく必要がある。

林 美里・友永 雅己さんのプロフィール

京都大学霊長類研究所にくらすチンパンジーや、アフリカにくらす野生チンパンジーなどを対象に比較認知科学研究をおこなっている。最後に紹介した事例について、以下のホームページで母子の再会に向けた要請書を公開している。SAGA ホームページ: <http://www.saga-jp.org/>

を探り、その発達の位置づけを明確にできればと考えています。その際、家庭におけるインフォーマルな数活動を数能力の基礎と捉えて1歳からの数活動を追究しています。

近年の数発達研究は乳児研究が隆盛し、その成果から乳児が2つの数システムをもつと主張されています。また、Gelmanらの計数原理もよく知られていますが、乳児期以降に数発達が如何に進展し、年長幼児の数理解・産出に達するのかが、その道筋は十分明らかではありません。年長幼児・就学児に関しては多くの研究が報告され、Dehaeneらの脳研究を踏まえたモデルも提案されていますが、発達初期に関しては実証研究の困難さも関係し、資料が十分とは言えません。

私はお母様のご協力をえて1~3歳の約2年間にわたる縦断研究をおこない、養育者とのやりとりを介した数唱・計数・数読字・数書字・数助詞・手指使用の多様な数活動を見出しました(山形, 印刷中)。また、数表記(数読字)に関して子どもが周囲の環境にあるカレンダー・エレベータ・時計・絵本などの事物の数を読みとる「数認識」も示しました。このような数認識は新たな数発達の契機となる可能性が窺えますが、上記の数活動は特定の状況における断片的な数理解にとどまっています。今後はこれらの数活動が体系的な数理解へ発展する過程と要因を探り、シンボルシステムに関する初期発達の解明を通じて学習障害の子ども達にも寄与できればと思っています。

最後に研究から感じたことを書いてみます。私はこ